

発生の報告から一年余り、未だ完全な終息が見えない新型コロナウイルス。感染者と死亡者の数が日々報告され続けています。毎日の事なので著名人の名前などが公表されない限りは段々と日常化されつつある事に、恐れも感じます。

感染のリスクを考えて、病院も介護施設も面会さえ難しくなっているのが現状です。万が一の場合でも、旅立っていく人との臨終の別れや、ご遺族の望む形での葬送は難しく、ただ感染者と死亡者の数だけが無機質に報道される世の中への違和感から、「生存だけを価値として認める社会」という皮肉を込めた表現で批判を投げかけた哲学者もいます。

仏教、特に禅では、今この瞬間、この場所で、生きる自分を見つめる。。。。。

「今・ここ・自己」という考え、生き方を大切にしてきました。しかし言葉の表面だけ理解して、今この瞬間、この場所で生きていることのみ<sup>に</sup>重きを置くならば、私達一人ひとりの命が薄くなってしまいます。

道元禅師は『正法眼蔵』「<sup>めんじゆ</sup>面授の巻」において、道元禅師自身が若き修行僧であった頃、師匠である如<sup>によじょう</sup>浄禅師との間に交わされた「仏と仏が一对一で出会う事を通じて代々受け継がれてきた仏法の受け渡しが今ここに実現された」という場面を感慨深く書き記しています。これは御仏の教えを生きる者は、自分一人の命だけを生きているのではなく、歴代の仏様たち

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

の命をも生きているのだ、という事実を発見した場面なのです。

現代は旅立つ方の姿がますます見えにくくなった社会だと言われます。勿論命が大切なものであることは間違いありません。しかしこんな時だからこそ私達それぞれも、私達を取り巻く社会も、多くの先人たちの歴史の積み重ねによって成り立っているのだという事を忘れてはならないと思います。単に数字で処理されてしまうことに慣れつつあるコロナ禍の現状にあっても、そこには一人ひとりに名前があり、ご縁を結んでいる家族や友人がいて、刻まれてきた尊い歴史があります。

そして私達には誰にも例外なくご先祖様がいます。道元禅師はその歴史の重みを自分の姿にも、周りの方々の姿にも見て取るようにとお示しになられています。その事実を忘れないために曹洞宗寺院では毎朝のお勤めで歴代の仏様、お祖師様方のお名前をお読み致します。それは「今・ここ・自己」を生きるとはどういうことなのかを日々心に刻む生き方をしていくためなのです。

— 終 —